

時系列がやや乱れるが、ここである挿話をしておこう。

朱乃が呉羽と知り合った後、まだ互いの水着姿を見せ合う前の頃のことだ。

* 『新しい世界』 *

八重代かりす

その日、朱乃は社会科教師に美術室へ呼び出された。

何事かと怪訝に思っていると、要するに雑用だった。美術室へ運び込まれたバカでかい絵画を、彼は壁に立てかけねばならない。しかし、彼は身長176センチだ。一人でその壁の高いところへうまく立てかけるのは難しい。

そこで人手が要る。ついては君に手伝って欲しい——ということだ。

しかしそれなら、他にも適任がいるはずだ。少女たちの中でも背が低く、特に貧弱な朱乃をわざわざ選ぶ理由はない。だから、朱乃は絵画を支えながら尋ねてみた。

すると、あっさりとは彼は語った。

「君を気に入っているから」

「……あの、私、男性恐怖症でして、殿方にそういうことを言われると、とても、困るのです
が」

そんな朱乃の言葉を冗談だとも思ったのか、彼は苦笑しつつもペラペラと話を進めた。

「出る杭は打たれる。しかし、世の中には打たれても打たれても出てくる杭がある。君はその

一人。教育者の端くれとしては興味を持って当然だろう」

「……私、そんなに叩かれていますか？」

「仄聞するに中学時代は風評が凄かったそうじゃないか？」

「尾ひれがついてますよ。なるほど、私は、三十人学級の中には一人しかいない変わり者かもしれない
しれません。しかし、百人の中になら二、三人は確実にいる類の凡人です」

「ふーん……日和ったの？」

「周囲と協調することを日和見と呼ぶならそうなのでしょう」

「今の君が周囲と協調しているようには、とても見えないけどね」

——何が言いたいんだ？この男は

正直、苛々した。たしかに朱乃はお世辞にも学級に溶け込んでいるとは言い難い。しかし、それは朱乃自身が理解しているものの、打開できない問題なのだ。そして、この手の問題は教師がシャシャリ出てもろくなことにならず、かつ、朱乃自身に具体的な被害が及んでいない以上、そっとして置くのが正しい選択だろう。

「『絶望からのエクソダス』」

いきなりの彼の言葉に朱乃は思わず「え？」と返してしまった。

「この絵の題さ。……ま、『絶望』という言葉に対する認識は僕とはややずれているがね」「はあ」

朱乃は彼の言葉に従ってその絵画を観察する。

絵画についてはほとんど無知な朱乃だったが、その絵を言葉で表現するなら

——嵐の大海原をボロボロになりながらも進む大船と、命がけでその船を守りぬこうとしている薄汚れた乗員たち

ということになるのだろう。

「でも、これ紀元前が舞台の絵には見えませんよ。この船なんて、どう考えても外洋用です。

モーセがエジプトを脱出した頃の中東にこんな船を建造する技術力があつたとは……」

「そりゃそうさ。これはピルグリムフアーザーズの絵ということになっているから。この場合の【エクソダス】とは『脱出』『逃避』の意味の一般名詞だね」

「ピルグリムフアーザーズ？ ここカトリックの学校じゃ……」

「『元』だよ。第一、彼らも同じ【アブラハムの使徒】だし、それを言い出したら、僕なんて唯物論的汎神論者だよ」

「スピノザ主義者——ですか？」

「そんなところさ。いずれにせよ、敬虔なカトリックからすれば、僕は無神論者も同然——君だって似たり寄ったりだろ？」

「私は……家の事もありますが、神への祈りの効能は評価しています」

「評価？」

「あれはアヘンですよ」

「『宗教はアヘン』——カール・マルクスかい？」

「ええ。でも、マルクスのそれって褒め言葉だと思うんですよ。アヘンって、当時は痛み止めとして、広く使われていましたから」

世の中にはどうにもならないことがある。

先に挙げたように貧困故に文盲だったり、あるいは本当に盲目だったりというのは、ほんの一例に過ぎない。生産力や技術力が貧弱な社会における飢餓や天災をはじめとする数多の——どうにもならない苦痛を『ごまかす』ために、宗教は発展したのだろう。きっと来世で、天国で、幸せになれる。神様はいつも皆を見守っていて、『いつか』公平な裁きを下してくれる。悉く嘘だ。しかし、優しい嘘だ。

そして、そういう優しい嘘にすぎらなくてはならない苦しみもきつとあるのだ。

だから、今でも末期癌の患者の痛みを和らげる為に、麻薬（アヘン）は使われている。それを『弱者のルサンチマン』と非難するものは、一人で勝手に麻酔なしで、虫歯を削るなり、盲

腸を切り取るなりして、医者に迷惑をかけていればいいのだ。

『宗教はアヘン』——実に至言ではないか。

無論、それは次善の策だ。アヘンは使い過ぎれば、極めて甚大な害悪となる。アヘンで痛みをごまかすだけでなく、病巢そのものを取り出せるなら、それに超したことはない。

例えば、中国で強力な一神教が誕生しなかったのはそのためだろう。つまり『病巢』そのものを取り出しうる環境にあったのだからだ。陳舜臣氏も似たようなことを述べているが、古代中国における病巢——苦しみの主な元凶は洪水による被害だった。だが、それは堤防を築く等、治水をきちんと行えば、被害を防ぎえる。対策の立て様がある。そういう時、人は神に祈る前に手足を動かそうとするものだ。

しかし、そうではない環境というのも、またある。この学園の神を産み出した古代中東などがその典型だ。中東における病巢——苦しみの主な元凶は砂漠である。だが、こんなものどうすればいい？ 洪水と違って、太刀打ちのしようがないではないか？ 現代の朱乃にすら、そう思わせるのだから、古代の人間は尚の事だったろう。确实なる諦観から、現実からの逃避へと至るのは必然であり、極めて強力な宗教——それこそ全知全能で唯一絶対の神を産み出した。手足を動かしてもどうにもならないから、人は神に祈ったのだ。

無論、どこであつても、歴史が下り、人口が増え、技術や制度が成熟し、発展途上国から、先進国になるにつれて、概ね信仰は薄れていく。人の力でできることが増えるからだ。手足を動かして、問題を解決できるなら、人は祈る前に動くものである。

だが、それは相対的、巨視的な話であつて、一個人の人生を決定づけるものではない。現代先進国である日本においても、朱乃がよく見かける路上生活者にとっては、人生は手足を動かしても、どうにもならないものだったのだろう。

程度の差こそあれ、常に世界は病巢に満ちている。故に宗教というアヘンは社会に必要とされている。

そして、マルクスの『宗教はアヘン』という言葉は『自分の共産主義国家建設の理論こそ、病巢そのものを取り出せる最善の策』という自信の裏返しでもあつたに違いない。なるほど、今のところ、共産主義は概ね悲惨な結果に終わっているものの、彼の思想や理論そのものは累進課税や福祉政策、労働法などの形で資本主義に吸収され、間違いなく社会を向上させた。

『我が父、マルクス』——とはシュンペーターの言葉だ。

経済学者の多くは、共産主義に反対する立場であつても、マルクス個人には敬意を払っている。その功績を評価してのことだ。

要は、アリストテレスやニュートンのようなものなのだ。その理論に誤りがあるうとも、それは彼の功績を否定するものではない。ガリレオやアインシュタインのように、彼らの理論を

否定した者であっても、彼らの偉業には敬意を払っている。

——いや、否定した者だからこそ……か。

最近の朱乃はそう考えている。

「僕も同じ解釈だよ」と社会科教師は満足そうだった。「しばしば挙げられる例を出せば、【ヘーゲル法哲学批判序論】が彼の宗教観を端的に示しているね。〃宗教上の苦しみは、現実的な苦しみの表現でもあるし、現実的な苦しみにたいする抗議でもある。宗教は、逆境に悩める者のため息であり、情なき世界の情であるとともに、精神なき状態の精神である。それは民衆の阿片である」という一節は、たしかに宗教への依存を否定してはいるものの、その宗教の効能を否定しているわけではない——マルクスの宗教観そのものだろう」

朱乃は息を呑み、頭を下げた。これはきちんと調べもせず、迂闊な発言をした自分の失態だ。

「すいません。私の勉強不足でした」

「……え、どういうこと？」

彼はきよとんとしていたので、朱乃は言葉を補った。

「私はその【ヘーゲル法哲学批判序論】を読んではいません。二次……いえ、三次資料を読んだだけで、彼の考えをわかった気になっていました。今の私の解釈は典型的な無知故の『車輪の再発明』です」

「……では、この部分を知らなかったのかい？」社会科教師は本気で驚いたようだった。「……ならば、それはむしろ君の聡明さの証だな。何しろ、無知でありながらも、理性を以って、真実に肉薄したのだからね」

社会科教師は慰めたが、朱乃にとってはそれも屈辱だった。「用が済んだのでしたら、これで失礼します」と、その場を去ろうとする。

しかし、朱乃が背を向けた瞬間、男は後ろから声をかけた。

『「アメリカなら、努力すれば、報われる」』

思わず、足を止める朱乃。

「この手の移民船の乗組員募集の謳い文句さ」彼は立ち去ろうとした朱乃に問いかけていた。

「まあ、情報源の記憶が曖昧だし、厳密な意味でのピルグリムファーザーズたちとはいささか動機が異なるが、『新世界』を目指した者たちの合い言葉であったことは間違いない。——さて、背面定理に気付いたかな？」

朱乃は即答した。「イギリスでは努力しても報われない」

「理由は？」

「イギリスが成熟した国家だったから。具体的にはもう耕す土地が残っていなかったから。農耕が産業主体であった時代には、それは最早切り拓くべき世界が、進むべき道が残されていないことを意味する。昔日本が満州を確保したかった理由の一つ」

「そうだね。農民一人辺りの耕地面積の少なさ——島の中に留まる限りは絶対に避けられない破局。必然的な土地の奪い合い。仮に勝てれば、一時は凌げるが、それは問題の先送りに過ぎない。何しろ、人間に対して、土地が圧倒的に足りないのだから。そして、負ければ、餓死」彼の言葉には真摯な尊崇の念が混じっていた。

「そういうゼロサムゲーム——常に誰かの犠牲の上にか、勝利が成り立たないルールに、己の命を賭けることをよしとしなかった者たちさ」

「それが【巡礼の父たち】——開拓者たちの本質であると？」

「そういう解釈が一番美しいと思うな。実際の彼らがアメリカ先住民にとっては侵略者であったとしてもね」

「……昔の人は大変だったんですね」

最後の朱乃の一言は何気ない相槌のつもりだったが、教師は当然プツと噴き出した。

「昔？ 昔の話？ 君は本当に昔の話と思っているのか？」

「どういうことですか？」

「じゃあ、例え話をしようか」

そして、彼はやや挑発的に「仮に君がこの学校の教職に就職しようとする」と人差し指を立てた。

「実際、今の時点でも、社会学における君の実力は、僕やあの《シヤスコが大嫌いな三浦先生》に比肩しうる。教師としての小手先の技術は数年もあれば身に付く。四年制大学卒業後を考えれば、君は十分にこの学園で教鞭をとる能力がある。しかし、君はこの学園の社会系教師にはなれない。理由はわかるだろう？」

朱乃は口を開きかけて……慌てて閉じた。

「即答できるにも関わらず、沈黙を貫けるのが君の凄さだな。僕が君の年頃だったら、情動のままに、ぺちやくちや喋りまくっているよ」

彼は微笑んだ。

「そうさ。正解だ。僕やあの《パルコが大好きな三浦先生》がいるからさ」

「……私がこの学園の教師となるために免許を取り、新規大学卒業者として、就職活動を行うまで、およそ七、八年。その時点でまだ、あなたや《郊外化が嫌いな三浦先生》は未だ現役」

「実際には転任という事態があるものの、それは教師の名前が変わるだけだ。その教職という限られた椅子の数は僕らが独占している。これではいくら君に実力があっても採用なんてされるわけがない」

彼は極めて皮肉気に言葉を繋いだ。

「何故なら、僕らは椅子を譲りたくないからだ。その意思は経営に反映され、僕やあの《服飾に金をかけない女性が嫌いな三浦先生》の雇用を守るため、新規採用を控えるからだ。この学園の労働組合がしっかりしていることも君の就職を邪魔するだろう。何しろ、新規採用者を容

れば、現役労働者たる僕らの椅子が脅かされるからね」

朱乃は三十人学級制導の頃にあったという騒動を思い出した。

一般に、教師一人辺りの生徒数は少ないほど、より適切な指導が出来る。そこで、一学級の生徒数を四十人から三十人に減らし、学級数を増やそうという運動がある。しかし、毎度の如く問題が頻出し、この学園のような例外を除いて、運動は遅々たるものだ。

そこで以前、一人の男がこんな提案をした。

最大の問題は、財源の確保である。特に人件費の確保である。というよりも、他に問題はほとんど存在していない。

少子化が進んでいるので、教室は余っている。学級数が増えたところで問題ない。教師の数も問題ない。安定した給料と、苦勞が多くともやりがいのある仕事の教職は、今や人気の的だ。倍率が百倍を超えることも珍しくない。採用数を増やしても質の低下はほとんどないだろうし、仮にあつても、生徒十人分の負担よりは少ない。

問題は教師の数が増えると、彼らに払う人件費が増える——その一点に尽きる。

だから、その男は提案した。

『教師と学級の数を4／3にする代わりに、教師一人辺りの賃金を3／4にすればよい』

と、市場原理の基本を述べたに過ぎないが、しかし、この場合では名案にも思えた。正教師の賃金は、慢性的不況下にあつても、変化しておらず、相対的高給である。教師が結婚出産等をしやすい職業であることを考慮すれば、その生活が破綻する恐れも少ない。これで財政をさほど悪化させずに、生徒はよりよい授業を受けることが出来る。さらに百倍という難関ゆえに、能力も意欲もありながら、正教師になれずに苦しんでいる若者を救済できる。実際、賃金が減ると明言されているにもかかわらず、教職志望の若者の多くはこの提案に賛同した。賃金が減つても、臨時教師やコンビニのバイトよりは高給であることが多く、それ以上に正教師になれる見込みが上がったからだ。

しかし、そこに労働組合が……より厳密にはその主要構成員たる中高年正教師が立ち塞がった。

理屈は色々ある——だが内実は一つだ。自分たちの給料を、取り分を減らされるのは、嫌だったのだ。

そして、組合は、高給ゆえに多額の組合費を払える中高年正教師には甘いが、未だ、組合費を払っていない若年正教師志願者には厳しい。

結局、この案は中高年正教師の既得権益を守るために潰されたのだった。

人間は己の既得権益に固執するという典型だろう。

とはいえ、これをそのまま述べては、刺が強いと朱乃は考えた。自覚がないのか自嘲しているだけなのかはわからない。だが、この社会科教師もまた正教師という点では既得権益層なのだ。だから、朱乃は

「実際には人事課の意向も強いと思いますよ。既に経験と実績を重ねている熟練労働者は安全牌ですから。経験や実績を重ねる機会をそもそも与えられていない新規労働者は、未知の存在です。人事課も所詮は雇われの身——保身を第一に考えれば、新人を採用しないという選択は必然ですよ」

と、穏やかな相槌を打つに留めた。

「そうだね……あ、言うまでもないことだけど、これは教師や教授に限った話ではない。大多数の職について、同様の現象が見受けられる」

「そうでしょうね。日本はそれこそ成熟した国ですから。高度経済成長期のように椅子の数が急に増えたりはしません」

成熟した国というのは、椅子の数が増えなくなった国、それどころか、椅子の数が減っている国を意味する。

「そして、バブルの頃と違い、誰も座っていない椅子がその辺りに転がっているなんてこともありません。就職氷河期と呼ばれた時代はそれが最も顕在化していました。でも、今は……」

「緩和されているね——椅子の占有者であった団塊の世代が掃された成果だ。しかし……」

「これは構造問題である？」

「その通り。椅子の数は有限で、しかも減少するのが基本だからね」

さらっと語った社会科教師であったが、朱乃はその意味を

——イノベーションか。

と咀嚼していた。どんな仕事でも人は慣れるものだ。慣れた仕事は早く終わらせることが出来る。いや、そもそも、人間とは現状に甘んじることをよしとはしない生き物である。往々にして、人間は工夫や改良を成そうとし、仕事の効率を上げていく。だから、一般に個人でも組織でも、初めの一年よりも次の一年の方が生産力は向上する。

それは素晴らしいことだ。

朱乃も、地道な工夫や堅実な改良をなす人間を敬愛している。

しかしそれが落とし穴なのだ。

生産力（供給）が増えてもそれを買い取る購買力（需要）が増えるわけではない。

つまり、去年の倍の商品を作れるようになっても、去年の倍の商品が売れるわけではない。同じ量しか売れないのに、その生産効率だけ倍になった時、どうするかと問えば、答えは一つだ。

椅子の数を減らすのだ。そこに座る作り手の数を半分に減らすのだ。作り手の数は減っても、その効率は上がっているのだから、商品は同じ量だけ生産できる。人件費も抑制できて、万歳というわけだ。

減らされた作り手——解雇された人間がどうやって、飯を食っていけばいいのかという問題を除けば、だが。

結局、そこで切り捨てられた人間の成れの果てが、朱乃がしばしば見かける路上生活者の姿なのだろう。

「しかし、減ったとはいえ椅子はまだ残存しています」朱乃は意地の悪い笑みを浮かべて問いかけた。「未だその椅子に座り込んでいる人間を押しつけて、その椅子に座るといっはいいかがですか？」

「その時は椅子に座る者が君の邪魔をするさ」

「具体的には？」

「まあ、色々ある。わざと仕事を教えないで、やることなすこと空回りさせ、その後で『あいつは仕事が出来ない。やる気がない。まったく、これだから、今時の若者は』とでもいえばいい」

「……ああいうのって、故意なんですか？」

「単なる無能という事もあり得るだろうが、すべてがその類だと考えているのなら、それはいささか年長者を馬鹿にしているよ。勿論、自分自身を偽っていることに気づかない者も混じっているかもしれないが」

「……」

「人間力やらコミュニケーション力やら、あるいは経験が足りないやら、言動が幼児的やら、そういうでっちあげのやりやすい主観的判断を使って君をけなすのもいいな。あのKKKのよう。何せ、足の早さや数学の点数、あるいは遵法という客観的判断では、僕らは負けてしまいかもしれないからね」

「さらりと混じったKKKという言葉に、朱乃はこの男がアメリカ生まれの黒人であることを、久々に思い出した。

あるいはこの男にもそういう(人種)差別に苦しんだ過去があるのかもしれない。そして、そういうKKKの連中は、なるほど、さぞや、その手のメルヘンチックでおファンダジヤな精神論が好きだろう。

何故か？

それこそ、知性や知識を公正に比較できる数学の試験などでは負けてしまうからだ(たとえ、彼の専門が社会学で、数学が不得手だったとしても、KKKに入らざるを得ない連中が相手ならば、この学園の教師が負けるわけがない)。いや、今でもあの国では白人と黒人では平均すると白人の方が教育水準は高いのだが、しかし、それは歴史的経緯から黒人に貧困層が多く、経済的に恵まれていなければ、勉強に集中し難いということに過ぎない。実際、同程度の経済水準の家庭なら、人種によらずほぼ同じ程度の学力となる。そして、KKKに入るような白人はおおよそ貧困層の負け犬なので、教育水準ではこの教師に劣る。

だが、なんとかして、いちやもんはつきたい。そういう時に、人間力やらコミュニケーション力というどうとでも解釈できる言葉が使われる。

「結局は保身さ——だが……いや、そして、僕はそんな連中と同じ土俵で、君に戦って欲しくはないんだ」

「彼らとは別の道を——新しい世界を切り拓けと？」

「そうなるね」彼はバツの悪そうな顔をした。

「先生、ご自分が何を仰っているかお解かりですか？——要約するとあなたは私に『個性を活かしてクリエイティブなこと』をしろと薦めているのですよ」

既に、朱乃は彼がこの《絶望からのエクソダス》を自分に見せた理由を理解していた。

状況は同じだ——と言いたいのだ。

勿論、今の我らの主要産業は農耕ではない。だが、それは耕すべき土地が、座るべき椅子に変わっただけの話だ。

昔からの耕地には既に地主が居座っているから、その耕地をいくら耕したいと意気込んでも報われないように、昔からの会社には既に社員が居座っているから、その会社でいくら働きたいと意気込んでも報われないのだ。

持つ者はいい。耕地や椅子が消滅したわけでもない。昔からの耕地や椅子という既得権益で飯を食べることができる。

だが、持たざる若者たちは——決断を迫られる。

一つは己も既得権益にありつこうとする道だ。これは土地を力で奪い取るなり、老いさらばえた奴らから譲ってもらいなりする道だ。実際、そうやって、生き残る者も多い。だが、椅子の数が減っていく世界において、その手法で生き残れる人間は少ない。その上、時を経る毎に減っていく。既得権益から遠いところに生まれた者にとっては、これはもう『絶望』以外のなものでもないだろう。

だから、そういう人間はもう一つの道を選ぶ。

それはその絶望から逃げ出すことだ。絶望以外に結果の存在しない条件に付き合うのをやめるのだ。

そう、この絵の中の者たちのように『絶望からのエクソダス』を成し遂げようとするのだ。

地道な工夫や堅実な改良ではない（前述の通り、それでは中長期的には椅子を減らす結果しか齎さない）——もっと大胆な発想の飛躍で道を切り拓こうというものだ。既に誰かが成し遂げた二番煎じでは駄目なのだ。それでは、結局、市場の共食いにしかならない。誰もやったことのない——自分にしかできないことを、新しい世界を見つけ出す必要がある。そうあの新世界へのエクソダスを敢行した先人たちの如く。

——『個性を活かしてクリエイティブなこと』をやらねばならないのだ。

成長期を終えたといっても、椅子がまったく増えなくなったわけではない。国内総生産は確かに微増している。それは、誰かが『個性を活かしてクリエイティブなこと』を行うことで、椅子の数をかすかであるものの、増やしているからだ。

そして、土地や椅子を失いつつある今——そういった挑戦はますます必須になる。

いずれ、成さねばならなくなることだ。それは理解できる。

だが——。

それはあまりにも分の悪い賭けだ。

言うまでもなく、一つの成功の影には、億万の失敗がある。

世間では、成功した人間の記録が語られるものの、実際には、失敗する人間のほうが遥かに多い。

このピルグリムファーズは、所詮、その数少ない成功の記録である。しかも、その成功例ですら、現実には最初の半年で半数が死んでいる。故にこそ、先住民ワンパノア族の助力を得て、かろうじて、生き延びた者たちは、新天地での収穫を神の恵みであると感謝する祭りを行った。今でも続く感謝祭Thanksgiving Dayの由来である。

だが、新しい世界での一度目の冬に凍死した者たちは、果たして己を成功者と規定できたであろうか？

いや、そもそも、新天地に辿り着く前に、船の中で病死した者、餓死した者、あるいは船そのものが難破し、溺死した者たちのことを顧みれば、美辞麗句で語られる成功者たち、開拓者たちの現実がいかに醜悪で悲惨だったかは語るまでもない。

当然である。『個性を活かしてクリエイティブなこと』とは、そういうことなのだ。先人たちの教えを無視するとは、そういうことなのだ。

だから——。

「この点についてのみは《村上龍を好む奴は下流だという三浦先生》と同意見です——馬鹿馬鹿しい。『個性を活かしてクリエイティブなこと』なんて、ほぼ確実に失敗しますよ、そんなものは。それなら、今ある椅子を狙う方がはるかに賢明です」

——と朱乃は断じる。

自分にしかできないこととは、往々にして、当人の考え違いだ。無知ゆえに先例に気付かないだけである（それこそ、先の朱乃のように！）。そうでなければ、誰にでもできるが、誰もがやらないことに過ぎない。それは高層建築物の頂上から、飛び降りることに似ている。つまり、ろくなことにならないと皆予測できるから、誰もやらないだけなのだ。

「だが、誰かがやらねばならないことだよ」

彼が少しばかり強い語気で即応したので、朱乃はいささか怯んだ。それに気付いた社会科教師は少し言葉を和らげる。

「少なくとも僕は有限の世界で奪いあうのは好きではない。リスクの高い選択肢を推奨するのは確かに教師失格だろう。だが、共食いになることが明白な選択肢を推奨して教師合格とはいえない」

「……ついでに、生徒が安全策を採った場合、先生は御自分の雇用も脅かされますからね」

言ってから、朱乃は——しくじった——と後悔した。つい過激な本音を口にしてしまった。心象を悪くしてしまつたかもしれないと危惧したが、彼は朱乃の本音を引きずり出したことを『成功』と考えらしい。「その通り」と、皮肉気に喜ぶ。

「ピルグリムファーズの大多数は、所詮負け犬だ。『幸せの青い鳥』を捜し求め、逃避を敢行した者は、惨めに死んだ愚者だ。これは間違いない。——ところで、君は旧世界に残って飢え死にした者は、賢者だつたと思うのかい？」

「……典型的な『合成の誤謬』ですね。その点は先生が仰つた通りです」と、朱乃は回答を避けた。「安全安定を第一に考え、地方公務員に成ろうという選択は一個人としては誤りではありません。しかし、皆が同じ選択を行い、高校生の就職希望の第一位が公務員になり、起業家志望者の比率が先進国中最低になつた時、その選択は全体として、誤りになります」

「だが、それでもいいという人間もいるよ。十分に既得権益を持っている人間は、自分とは関係のないところで、共食いが起こつても知つたことではないだろう。先に述べたようにね。あるいはその共食いに勝ち残れる見込みが高く、かつ、感傷的な人間もこの『合成の誤謬』を支持するかもしれない」

「……前者が傍観するのはともかく、後者がどうして支持するのです？」

これから、共食いを始めるのならば、相手は少ない方が楽だ。いくら、勝ち残れる見込みが高いとはいえ、そのための犠牲を減らすことを念頭に置けば、『合成の誤謬』を避けるのが懸命な気がする。

「感傷的な人間なら、過当競争になつていても、勝ち残つたことそのものに価値があると思えるからさ。この場合、物質的な報酬は減るものの、精神的な報酬は増える。自己満足だよ——しかし、君は実利を採るだろう」

「当然です」

「だから、それを避けようとする者が出てくる。袋小路に陥つた現状を打破しようとする者が現れる。当人の自覚の有無とは関係なく、ね。このピルグリムファーズの如く、椅子の数を増やそうとする者が、君の如く、新しい世界を拓こうとする者が……」

「……どうして、そこに私も含まれるのですか？」

「向いていると思うからさ。少なくとも、君には、己に不利な過当競争に身を委ねる被虐趣味はない。あるとすれば、加虐趣味であり、勝算がある時にのみ、勝負に挑みたいと考えている」
「……随分とまあ私を評価して下さいようですが、私が単なる無能だつたらどうするんですか？」

朱乃が呆れのあまり、己の左手で額を握り締める。すると、彼が「そりゃあ、僕が君にメモロ……」とか口走りかけた。

男性恐怖症の朱乃は思わず一睨みする。

効果は観面に表れ、彼はしばらく口をパクパクさせた後、コホンとわざとらしく咳払いをし

た。

「いずれにせよ、君は選良者だ。道を切り拓ける見込みが高いのは、君のような存在さ」

——僕は君に世界を広げる人間になって欲しいんだよ。

彼はそう言って話を終えようとする。

だから、朱乃は最後に質問した。

「ところで先生、今の話、何人の生徒にしました？」

彼は苦笑いのまま何も言わなかった。

「二宮朱乃」

あの時、最後の質問の後、その社会科教師は珍しく強い語気で言った。

「人が環境に不満を抱いた時、とるべき道は二つある。自分を環境に適応させるか、環境を自分に適応させるかの二つだ。ここでいう環境の主体が社会の場合、前者を処世と呼び、後者を政治と呼ぶことになるな」

「……ならば、私はもっと処世を身に着けるべきですね」

「たしかに誰かが決めた箱庭の中で生きていけるなら、それに越したことはないさ。だが、それが許されるほど世界が優しいとは限らない」

「……」

「処世とは所詮対処療法に過ぎない。『他人』が求める要求とは、往々にして、果てしなく増大する——だから、忘れるな、君は一人だ。世界にたった一人なんだ」

朱乃は——それは実に嫌な話だ——と思った。

おそらく、彼も同じように思っているのだろう。付け加えれば、呉羽も似たようなことを考えていたのだと、朱乃は後に知ることになる。

そして、まったくの別人が異なる論理で同一の結論に辿り着いたということは、それが普遍的妥当性を伴った真実であるということなのだ。